

『道徳感情論』から『国富論』へ——「見えざる手」の真意

永井四郎（麗澤大学<名誉教授>）

1. 背景と目的

これまで、アダム・スミスの2大著作『道徳感情論』（1759）と『国富論』（1776）における自己利益と倫理の問題をめぐるさまざまな議論が展開されてきた。『道徳感情論』では、人間の行動を支配するのは同感、慎慮そして慈愛であり、人間は感情に突き動かされて行動する存在として捉えられている。一方『国富論』では、人間は自己利益（利害）に動機づけられ行動する存在として描かれ、倫理・道徳の問題は論じられていない。

現代経済学における自己利益の最大化を目的として行動する合理的個人の仮定は、スミスの次の叙述に原点を見ることができる。「われわれが食事を期待するのは、肉屋や酒屋やパン屋の慈悲心からではなく、彼ら自身の利害にたいする配慮からである。われわれが呼びかけるのは、彼らの人類愛にたいしてではなく、自愛心にたいしてであり、われわれが彼らに語るのは、けっしてわれわれ自身の必要についてではなく、彼らの利益についてである¹。」

アマルティア・セン（1987）は、経済の内外には単純な利己利益の追求だけでは説明しきれない多くの活動があり、スミスはいずれの著作においても自己利益の追求を他よりも上に位置するものとはしていないこと、さらに動機と市場に対するスミスの複雑な見解が誤って解釈され、現代経済学においてスミス流の幅広い人間観を狭めてしまったと指摘する²。

一方T.セドラチェック（2011）は、「社会の幸福は、利己主義がもたらすことがありうるし、むしろそうあるべきだ。」とするマンデヴィル（1714）の主張³が、スミスの「見えざる手」をめぐる解釈に誤解を生んだ原因であると説く⁴。すなわち自己利益の追求の結果、市場の見えざる手が働いて社会の幸福が実現されるというのである。しかしスミスは「ほとんどの点でマンデヴィルの議論は誤っている。⁵」と述べていることを確認しておくべきである。

以上の「アダム・スミス問題」について、現在も論者の中で議論の一致が見られていないように思われる。問題の核心は、『道徳感情論』を『国富論』の思想的基盤としてどのように位置付けるかという点である。

本報告の目的は、従来の論者のいずれもが着眼してこなかった事項に注目し、その視点から「見えざる手」に秘められたスミスの意図を探ることである。

2. 分析の手順

アダム・スミスは1723年6月5日に洗礼を受けたキリスト者（プロテスタント）であるが、その信仰はきわめて純粋であることが『道徳感情論』の以下の叙述から推察される。

1 アダム・スミス 水田 洋監訳『国富論 1』（岩波文庫）39 ページ。

2 アマルティア・セン 徳永他訳『経済学と倫理学』（ちくま学芸文庫）49—53 ページ。

3 バーナード・マンデヴィル 泉谷 治訳『蜂の寓話』（法政大学出版局）

4 T. セドラチェック 村井章子訳『善と悪の経済学』（東洋経済新報社）377 ページ。

5 アダム・スミス 水田 洋訳『道徳感情論（下）』（岩波文庫）316 ページ。

「自分のふるまいと行動の全体を胸中の偉大な同居者、偉大な半神 (the great inmate, the great demigod within the breast) が規定し、是認する、抑制され訂正された諸情動にしたがって統御する人、そういう人だけが本当に徳のある人であり、愛と尊敬と感嘆の唯一の本当で適切な対象なのである。それは無感覚と尊厳および適宜性の感覚に基づく高貴な不動性、崇高な自己規制とはまったく同じとはとうていいえないのであって、前者が生じるに比例して後者の値打ちは多くの場合まったく除去されるほどなのである。⁶⁾」経済学者の多くはこうしたスミスの聖書信仰を無視し、「胸中の偉大な同居者、偉大な半神」を「胸中の公平な観察者=当人の良心」に置き換えてしまう⁷⁾。その結果「見えざる手」は、スミスが意図したものと異なったものになってしまう。

本報告では、「聖書信仰者としてのスミス」に注目し、「胸中の偉大な同居者、偉大な半神」を「人間の良心」に置き換えた場合、スミス理解にどのような誤謬をもたらすか、スミスの意図した「見えざる手」がどのように曲解されるかが論じられる。

3. 結果と考察

最大の誤謬は以下の①であり、それによって②、③が生まれる。

誤謬①：胸中の偉大な同居者、偉大な半神（公平な観察者）は私自身（良心）である。

⇒胸中の偉大な同居者（半神）とは、イエス・キリストである。

誤謬②：世間の称賛、非難の不規則性（見えざる手）に導かれて知らず知らずのうちに住みやすい社会が形成されていく。ただしこの称賛と非難は、公平な観察者の行為と実際の行為者の行為との関係において生まれる。

⇒スミスの言「この世におけるすべてのできごとは、賢明で強力で善良な神の神慮によって導かれているのだから、われわれは何事が起ころうとも、すべては全体の繁栄と完成に向かっているのだということを確信していいのであった。⁸⁾」

誤謬③：公平な観察者の判断基準は、それが適用される社会に固有なものであり、社会の慣習から影響を受けるので、諸社会の間で完全に一致することはない。

⇒公平な観察者の判断基準とは神慮であり絶対的なものである。

(結果) スミスが『国富論』で意図した「見えざる手」は「神の見えざる手」である。

スミスは、徳を有する人と悪徳の人が混在する経済社会において、神の見えざる手の機能が市場に働き、公共的利益がもたらされると考えた。

(考察) これまで経済学者がスミスの信仰的側面を取り上げず、あえてそれを回避してきたわけは科学としての経済学という観点からであろう。たしかに経済学は宗教ではない。だがスミス経済学の本質について、彼の信仰を理解せずして把握することは不可能であろう。

6 アダム・スミス 水田 洋訳『道徳感情論（下）』（岩波文庫）107 ページ。

7 例えば堂目卓生『アダム・スミス』（中公新書）2008年 36 ページ。

8 アダム・スミス 水田 洋訳『道徳感情論（下）』（岩波文庫）242 ページ。